

桃山陶の種類 **連房式登窯**

おりべ
織部

美濃桃山陶の
集大成！

17世紀初頭

黄瀬戸、瀬戸黒、志野の技法を駆使し、造形に作為を加えたやきものです。器形の歪みと文様や色調の多彩さが特徴で、色彩や技法によって9種類に分類されます。



おりべぐろ
織部黒

瀬戸黒茶碗が杓形に変化したもの。大窯で焼かれ始め、連房式登窯で量産されました。



くろおりべ
黒織部

杓形茶碗の一部に鉄釉を掛け残し、鉄絵や白抜きの文様を付けたもの。



あおりべ
青織部

銅緑釉と長石釉を掛け分け、長石釉の部分に鉄絵による文様を描いたもの。



そうおりべ
総織部

全体に銅緑釉を掛けたもの。



なるみおりべ
鳴海織部

白土と赤土をつなぎ合せ、白土の部分に銅緑釉を掛け、赤土の部分に白泥で文様を描き鉄で輪郭をとったもの。



しの おりべ
志野織部

志野と同様に鉄絵に長石釉を施し、連房式登窯で焼かれたもの。



あかおりべ
赤織部

赤土で作った器形に、白泥で文様を描き鉄で輪郭をとったもの。



みの いが
美濃伊賀

伊賀焼を模して作ったもの。全体に灰釉を薄く施し、その上に長石釉や鉄釉を流し掛けています。



みの からつ
美濃唐津

唐津焼を模したもので、鉄絵を描き、胎土や釉に鉄分を加えて褐色になるようにしています。

土岐市美濃陶磁歴史館

初版発行：2016年2月26日
第2版発行：2017年2月24日

編集：公益財団法人 土岐市文化振興事業団
住所：〒509-5142 岐阜県土岐市泉町久尻 1263
電話：0572-55-1245
ホームページ：http://www.toki-bunka.or.jp/

※出土品写真について
元屋敷陶器窯跡出土、重要文化財
所蔵先表記のないものは、
全て土岐市美濃陶磁歴史館蔵

なんぼんじん
南蛮人くん
織部焼の南蛮人燭台をモデル
にしたキャラクターです。



国史跡

**元屋敷
陶器窯跡**

所在地：岐阜県土岐市泉町久尻
時期：16世紀後半～17世紀初頭
(安土桃山時代～江戸時代初頭)



元屋敷東2号窯跡 (大窯)

元屋敷東1～3号窯 (大窯)

操業の順序は、以下のように考えられています。
(東1号窯は2度の改築が行われています。)

東1号A窯	16世紀後半	上段：操業時期 下段：主な製品
	天目茶碗・皿類・播鉢	
東2号窯	16世紀後半～末	
	天目茶碗・皿類・播鉢・黄瀬戸・瀬戸黒・灰志野	
東1号B窯	16世紀末～17世紀初頭	
	天目茶碗・皿類・播鉢・黄瀬戸・瀬戸黒・志野	
東3号窯	17世紀初頭	
	志野・織部黒	
東1号C窯	17世紀初頭	
	志野・織部黒	

元屋敷窯 (連房式登窯) 焼成室14室、全長24m

17世紀初頭に久尻の加藤景延が唐津に向いて作り方を学び、美濃で初めて築いたとされる連房式登窯です。景延とその父景光は美濃の陶祖とされています。元屋敷窯の操業は慶長10～12年(1605～07)頃に始まり、慶長17年(1612)頃までと考えられています。

連房式登窯は焼成室が複数連なっていることが最大の特徴です。また、焼成室内で均質な温度を保ちやすいことから、安定的な銅緑釉の焼成が可能となり、元屋敷窯では最盛期の織部が焼成されました。



元屋敷窯跡 (連房式登窯)

もとやしきとうきかまあと おおがま もとやしきひがし
元屋敷陶器窯跡は、大窯3基(元屋敷東1～3号窯)
れんぼうしきのぼりがま もとやしきがま
と連房式登窯1基(元屋敷窯)からなる古窯跡群で、
昭和42年(1967)に国史跡に指定、平成25年(2013)に出土品が重要文化財に指定されています。

16世紀後半、畿内を中心とした「茶の湯」の流行の影響を受け、美濃窯において茶陶(美濃桃山陶)の生産が始まります。元屋敷陶器窯跡は、その前段階の天目茶碗・小皿・播鉢を主要器種とする時期から、黄瀬戸、瀬戸黒といった茶陶の生産が始まり、志野、織部で茶陶や懐石用食器の生産が最盛期を迎えるまでの変遷を捉えることができます。

おおがま 大窯の構造

15世紀末に美濃窯と瀬戸窯で登場する単室の窯です。前段階の管窯が地下式であったのに対し、大窯は地上に構築されるようになります。そのことによって、以下のような多くの利点が生まれました。

- 天井を高くすることができ、窯の容積が広がったこと。
- 高温が安定的に確保できるようになったこと。
- 出し入れ口が設けられ、窯詰め窯出しの作業効率が上がったこと。

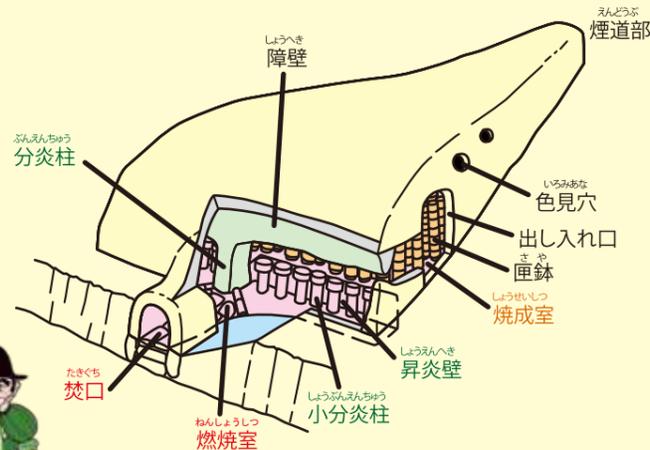
他に・・・

- 製品を中に入れた匣鉢を天井まで積み上げる窯詰め方法によって、1度に焼成できる製品の数が増加。

焼成中に瀬戸黒を引き出すこともできるようになったんだ！



匣鉢



瀬戸市 1993 『瀬戸市史』陶磁史篇四 p.8 に加筆修正

●コントロールされる炎

焚口から投入された薪が燃焼室で燃やされ発生した燃焼ガス(炎)は、分炎柱→小分炎柱と進み、昇炎壁にぶつかって吹き上がり、焼成室に入ります。焼成室に入ったガスは、天井と床面と二手に分かれ、焼成室全体を包み込みます。

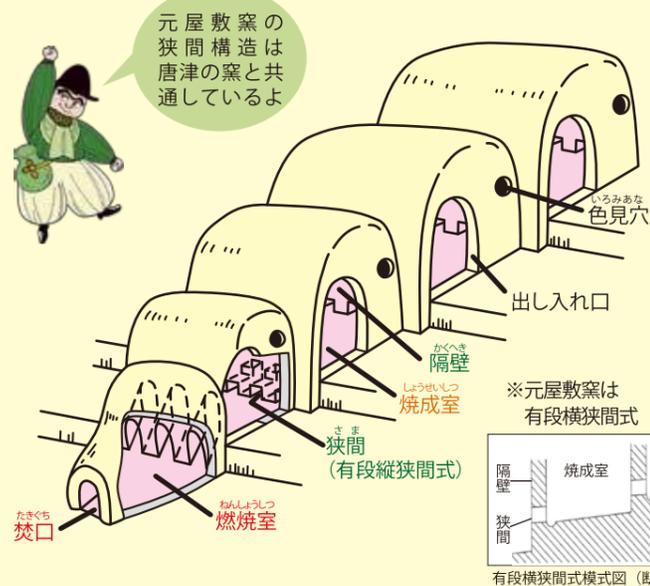
れんぼうしきのぼりがま 連房式登窯の構造

美濃窯では、17世紀に大窯から転換がはかられて以降、江戸時代を通じてこの窯が使用されました。

焼成室が複数連なる構造で、大量生産が可能となりました。さらに、焼成室の奥行が狭く温度を均質に保ちやすいことや、余熱を利用した焼成方法などにより、生産性が格段に上がりました。

構造は、焚口と燃焼室が1番下に設けられ、各焼成室ごとに投薪口と出し入れ口があります。焼成室と焼成室の間には隔壁があり、隔壁の下方に「狭間」という通炎孔が設けられました。狭間構造は窯によって異なり、床面の傾斜と狭間の形状の違いで数種類に分けられます。

窯詰め方法は、主に匣鉢を積み上げる方法です。



●焚き方—余熱を利用して、熱効率を上げる—

- ① 焚口から薪を燃焼室に投入し、ある程度まで温度を上昇させます。
- ② 1番下の焼成室に移り、横の投薪口から薪を投げ入れて焼成を行います。
- ③ 1室が終わったら、余熱で暖まっているすぐ上の焼成室に移り、同様に焼成を行います。

元屋敷陶器窯跡出土品

元屋敷陶器窯跡の出土品は、土岐市所蔵分2,041点と、岐阜県立多治見工業高等学校所蔵分390点が、美濃窯における陶器生産の変遷が分かる資料として、平成25年(2013)にそれぞれ重要文化財に指定されています。

多治見工業高校所蔵分は、昭和初期の発掘ブームにより陶片が地元から流出していくことを憂慮した高木康一教諭が、昭和6年(1931)に発掘

を行い、学校に残した陶片の一部です。

土岐市所蔵分は、地元の製陶業者を中心につくられた団体・美濃陶祖奉賛会が、昭和24年(1949)に窯跡を盗掘から守るために陶片を掘り出し保存してきた資料と、平成に入って行われた史跡整備に伴う発掘調査の出土品によって構成されています。大窯3基の存在は、平成の調査によって明らかになりました。

桃山陶の種類 大窯

きざと 黄瀬戸

16世紀末

黄、緑、茶・・・陶器に彩りが加わりました。器形は、歪みなく端正。



せとぐろ 瀬戸黒

16世紀末

初期の器形は、千利休が作らせたとされる楽茶碗と共通しています。



灰釉を意図的に黄色く発色させたやきもの。器種は向付や鉢などの懐石用食器、花入、水指などで、刻線文や印花で文様が施されます。緑彩(胆礬)や鉄彩を装飾した輪花鉢や向付は、中国華南三彩の影響により誕生したと考えられます。

しの 志野

16世紀末～
17世紀初頭

白は憧れ

日本で初めて、釉薬によって「白」が表現できるようになりました。

長石を釉薬とした白いやきもの。長石に灰を含む釉薬を施した「灰志野」が志野に先行し、筆による絵付が始まります。志野の器種は、中国の白磁や染付の写しとして丸皿などが、茶陶製品として茶碗や鉢、向付などが作られました。

